

「ロシアのウクライナ攻撃に涙と怒り」

2022年03月14日

私は80歳を過ぎた。人は年を取ると、涙もろくなると言われる。ロシア軍に攻撃されているウクライナの人々、殊に、子どもたちの痛々しい姿を見ると、涙が止まらなくなる。また、体力がなくなったせいか、体の不自由な人たちが、戦禍を逃れようと避難している姿を見ると、同情に耐え得ない。涙と同情は、プーチンに対する怒りの所為である。こんな理不尽があっただろうか。命への断じて許せない冒涇、国際法違反の暴挙である。

21世紀、良好な国際的な関係を結んで、互いに生存できるグローバル化した時代に、国境線を超えて他国に侵攻するなど、考えられない、あり得ないことだと思っていた。ところが、プーチンはウクライナ東部の親ロシア人が迫害されているので、彼らを守るために、支援の軍隊を送ると言っていた。迫害の真偽は分からないが、他国に軍隊を送り込むことは国際的に容認できることではない。ところが、ロシア軍は、ウクライナ全土の軍事施設を攻撃した。ウクライナ軍の反撃に合い、計画通りに侵攻できなかったようである。ロシア軍は作戦を立て直して、公的な建物、民間の建物、最近では、学校、病院までも、攻撃対象にし、もはや侵攻などではなく、侵略戦争である。一般市民の痛ましい死者は増え続け、ウクライナ人の悲しみ、怒りは天にまで届いていよう。

プーチンは、ウクライナがNATO（北大西洋条約機構）に加盟したら、ロシアの安全が脅かされるので、加盟を阻止し、非軍事化させるためであると言っている。独立国に対し、他国との条約提携に関し、口を出して、指図し、内政干渉する筋合いはないだろう。プーチンは、米ソ対立時のソ連時代の夢を追っているのではないか。経済力は、中国の10分の1にまで、落ち込んでいる。弱小化したロシアに我慢ができず、ベラルーシのようにウクライナを支配下に置きたいのではないか。今回の、人間を非道に殺害するロシアの攻撃はプーチン一人の思惑による戦争ではないかと思ってしまう。

とにかく、暴虐な戦争を止めなくてはならない。ロシアでは、国営テレビは情報を捻じ曲げ、政権に都合のいいものだけを流し、不利な情報は遮断し、違反する者には刑事罰を与えているという。現代戦は、情報戦であることをまざまざと見せつけている。ロシアからの「戦争反対、プーチン止めろ」の声は起きにくいようだ。武力対決は核、生物兵器などが予想され、壊滅的になる。経済制裁がロシアの経済を麻痺させ、戦争中止を可能にするのではないか。経済制裁は時間がかかり、制裁する側も打撃を受けるだろう。無辜の犠牲者や、その他多くの犠牲を負うだろうが、強力な経済制裁を科してほしい。

ロシアの世界からの孤立は避けられない。経済だけでなく、文化、芸術、スポーツでも締め出されていく。有能な人材もロシアから離れていくだろう。ロシアの受ける国家的マイナスは計り難く、大きいものになる。プーチンの蛮行は歴史に長く記憶されるだろう。

今、世界は歴史の分かれ目に立っている。プーチンは過ちを認めない頑固な性格のようだが、ロシアの侵略戦争を成功させたら、世界の法的秩序は崩壊する。独裁者たちは力を振るえば、欲望を達成できると思ってしまう。プーチンの野望を阻止することによって、世界の安全が保障されることを肝に銘じたい。

そのために、私たちは小さな声でも、「戦争反対、プーチン 軍を引け」と言い続けたい。そして、ウクライナを支援するため、小さくとも痛みを負うことを厭わない。愛は犠牲なくして、相手に届くことはない。ウクライナ人の苦しみは他人事ではなく、私たちに直接関わることだと、深く認識したい。